

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第12回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日 付：5月26日（日）1日目

大学名： 清華大学

氏 名： 劉天樂

飛行機が着陸に入ったちょうどその時、海を挟んだ向こう側にある滑走路を見つめながら、ついに日本にやってきたという実感がこみ上げてきた。3時間のフライトは少し退屈で疲れも感じたが、日本に着いてから物珍しさや新鮮さも手伝い疲れは一気に吹き飛んだ。でも空港内の所々に簡体字の中国語表記があったので、馴染み深さも感じ、あまり異国にいるときのなじみの無さと戸惑いを覚えることは無かった。

当日の夕食は、空港内のホテルでのビュッフェだった。数ある料理やデザートの中で最も印象深かったのは、自分の手作りのアイスとチョコレートが食べられることだった。イチゴ味のアイスは、マクドナルドやケンタッキーのアイスのように見栄えがよく、甘くはなかったが、自分の手作りだけあってその美味しさは格別なものだった。こうして私たちはホテルで楽しいひと時を過ごすことが出来た。

食事を済ませてお手洗いにいった時、日本ならではのプロ意識と真剣さを実感した。普通の便器だが非常に清潔できちんと整っており、中国国内にあるような造りが粗末で異臭を放っているようなトイレではなかった。手洗い場の自動給水の水量も丁度良く、必要最小限の水で手をきれいに洗うことができた。このような細かなところに日本人の生活態度や生き方が現れており、またこれこそ資源や土地が限られている状況下でも高い競争力や評判を維持することができている秘訣なのだろう。

京都に向かうバスの中で、他校の生徒たちと意気投合して仲良くなれたことは、今回の訪日の最も大きな収穫かもしれない。楽しさ満載の初日はこうして幕を閉じた。

日 付：5月26日（日）1日目

大学名： 中国農業大学

氏 名： 費書朗

今日の北京は、曇り空で時折小雨が降っていたが、私は爽快な気分と興奮が入り混じった気持ちで、帽子やジャケットそして靴からパソコンケース、旅行バッグまですべて中国らしい赤一色で決めて旅に出発した。これらの赤い品物はそれぞれ何の意図もなく別々に買ったものだが、今回の旅ではこの赤色にきっと特別な意味があるに違いないと思った。

飛行機が30分ほど遅れたこと以外は、すべてが順調だったが、実際は順調というよりも、まさにパーフェクトという言葉が口を突くぐらいに何もかもがとてもスムーズだった。初日に主催者側の用意周到なもてなしを受けて新鮮味に浸った以外に、私にとって何よりも大切なのは家族と連絡を取ることだった。空港へ向かう途中で、私は両親や親友たちに電話でお別れをして、飛行機に搭乗する前には母とボーイフレンドに最後にもう一度電話をし、大阪に到着した後もまるで宝物を見つけたかのように慌しく食事の時間も惜しんでwifiで家族や親友たちと連絡を取った。人は楽しいひと時を家族や親友たちと分かち合いたいと思うものだし、故郷を離れて異郷の地にいる時に最も恋しくなるのもやはり彼らなのかもしれない。

最後に触れたいのは、農大の仲間と一緒にとても苦労した今晚のディスカッションだ。明日は京都大学の学生たちとの交流がある。親睦会での出し物の準備以外に最も大変だったのは、今晚になって農大は明日の討論交流会のために「東アジアの経済貿易体制」という議題について準備しておくように告げられたことだ。私たち6人のうち経済関係

を専攻しているのは一人だけで、私に至っては東アジアの国家間ではどんな貿易体制が形成されているのかさえ知らない経済オンチだ。しかし農大の私たちは不屈の精神の持ち主である。たとえ夜中までかかっても、分からないことは勉強し、知らないことは調べ、はっきりしないことは相談できる。よって皆は片付けが終わった後一緒に集まって、今回の旅で最初の、また最も忘れ難い討論会を開いたのである。その後私たちの考えが次第に整理され、認識がまとまっていくにつれ、最初の五里霧中の状態から次第に霧がすっきり晴れていくような思いがした。私たちはこの経験を通して自信が深まり、そんな自分に少し感動を覚えた。その後の親睦会の出し物も、リコーダーやコーラス、B-Box (ヒップホップの一種) など、元気いっぱい中国らしいものに決まった。農大と「ジャスミン」、皆さん請う御期待！

この数日間は寝るのが遅かったが、満ち足りた幸福感が疲労の不快感を吹き飛ばしてくれていた。

日 付：5月26日（日）1日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 馬博釁

もしかしたら、初日だから書くべきことなどまだ何もないだろうという人もいるかもしれない。でも私にしてみれば、正に今日のこの日について数え切れないくらい沢山の思いがあるのだ。

初日は出会いの一日だった。6つの大学からさまざまなタイプの若者たちが集まり、総勢35名からなるグループに加わった。互いに簡単な挨拶で済ますということではなく、心から打ち解けて意気投合し、そこから友情が始まった。

また初日は変化の一日でもあった。わずか数時間のフライトで、私たちは慣れ親しんだ世界から、今ではこれまで映画や漫画でしか見たことがなかった世界にいるのだ。標識の文字が漢字からかなに変わったこと以上に、中日両国の生活態度や関心事の違いに強烈なコントラストを感じた。空港係員の心のこもった笑顔と真面目な態度から、日本人の仕事に対する真面目さと責任感の強さを実感した。そして私が最も感動したのは、空港内で清掃員のお婆さんと空港警備員が行き交う際に、互いに軽くお辞儀をして挨拶をしていたことだ。このような些細な心温まるシーンは、せわしい中国ではまずお目にかかれないものだ。

まだ初日、始まったばかりだが、色々な事を思った一日だった。しかしこの後の旅ではより多くの事が私たちを待っているのだ。

P. S 空港係員のきれいなお姉さんに話しかけられて本当に胸がドキドキしたよ！

日 付：5月26日（月）1日目

大学名： 北京外国語大学

氏 名： 張田

昨晩は興奮してなかなか眠ることができなかった。今日の午後は1時間遅れてのフライトとなったが、でもそんなアクシデントも私は全く気にならなかった。日本に到着して関西国際空港から出た時、日本の美しい夜景に目を奪われた。深呼吸して、新鮮な空気を味わうと気分がすごく爽やかになった。

多忙な1日が終わり、みんな非常に疲れていた。しかし夕食のビュッフェは、ハードな1日をねぎらう最高のご褒美となった。細やかで行き届いたサービスを受けながら食べたい品を選ぶ。丁寧に美しく彩られた料理の盛り付け方から味わい深さまで、そのどれもに驚嘆せざるを得なかった。数ある料理の中でも私が特に気に入ったのは、見た目が美しい上に味も絶品なスイーツだった。プリンもシュークリームも食べ出すと止まらない美味しさだった。

食事を済ませた後バスに乗り、窓から見える美しい景色をみんなで堪能しながら、呂さんの詳しい解説に耳を傾けた。和気あいあいとした雰囲気の中でみんなはすぐに打ち解けることができた。

日 付：5月27日（月）2日目

大学名：中国農業大学

氏 名：趙未央

朝食を済ませた後、島津製作所の見学に出かけるまで時間がまだあったので、ホテル付近の路地裏を散策した。ここが京都の庶民的な生活環境なのだろう。路地に立ち並ぶ家屋の軒は低く、玄関も非常に小さい。日本の家屋が非常に可愛らしく見える。その後、皆と一緒にホテルの近くにある島津製作所跡地にある記念資料館を見学し、日本の科学技術産業と教育の発展における島津源蔵氏（初代）と島津源蔵氏（二代目）の多大なる功績について理解を深めることができた。一つひとつの完成度の高い教材は、物理現象を非常に分かりやすく説明したもので、島津製作所にみなぎる顧客への愛情を形にしたものだ。続いて私たちは、島津製作所製の医療用機器や分析計測機器の展示を見学に行き、井上統雄部長の熱烈な歓迎を受けた。科学技術、地球と人に対する島津製作所の姿勢は現代社会のニーズにマッチしたものだ。中国の一部の企業では、利益を追求するあまりに堅持すべきものがないがしろにされている。私たちは、島津製作所で従業員用のお弁当を頂いたが、そのサービスも至れり尽くせりであった。

午後には京都大学を訪問し、熱烈な歓迎を受けた。私は二年前に京都大学に出願した時のことを思い出した。今でも非常に残念でならないが、当時の中日外交摩擦が原因で入学を果たせなかった。説明会で京都大学の紹介を聞いた後、私たちと経済学部（注）の学生たちは第3グループとなり、校内の見学とその後のグループ討論会に臨んだ。私たちはあらゆる方法で、言葉の壁を乗り越えて互いに心を通わせることができ、温かさと思いやりそして互いの友好を感じた。私は、Yukariさんや山本佳祐さん、山崎将平さん、志水優剛さんと友達になることができ、この友情が今後も続くことを願っている。交流の促進こそ中日友好の最も直接的な表現方法なのだ。今日の晩餐会は大盛況で、中国側日本側双方が出し物を披露して、この素晴らしいひと時の思い出をいつまでも残すべく、みんなで記念写真も撮った。

まだまだ書き残したいことがたくさんあるが、日記帳のスペースに限りがあるのが残念だ。そうだ、晩餐会の後に京都駅に行き、居酒屋に入り、日本のナイトライフを体験できたことも収穫の一つだ。

日 付：5月27日（月）2日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：賈晨宇

昨晚、京都市内にあるリーガロイヤルホテルに一泊し、身体の疲れを癒すことができた。今日から本格的に日本での訪問交流活動が始まる。

今回の訪日で、まず訪れるのは島津製作所だ。私は病院の内科に勤務している私の友人の母親から、かねてより島津製作所の評判を聞いて憧れを感じていた。まず、島津創業記念資料館に行き、100年以上前に建てられた木造住宅を見ながらガイドの説明を聞き、胸が高鳴るほどの尊敬の念が生まれた。初代の島津源蔵氏は、初めの頃は一職人に過ぎなかったが、科学技術の影響を受けて教育用理化学機器分野に毅然と足を踏み入れた。島津氏は化学分野の教育を受けたことがなかったが、苦勞をいとわない不屈の精神と勤勉さで地道な努力を重ねて困難を乗り越え、ついには島津製作所を立ち上げることができた。二代目島津源蔵氏は、父親の優れた資質を受け継ぎ、小学一年の学業しか履修していないが、発明によって数多くの特許を取り、日本の「エジソン」と呼ばれた。このようなひたむきな精神が島津製作所を大企業へと成長させる原動力となっただけでなく、職員一人ひとりにも受け継がれ、後に田中耕一氏のようなノーベル化学賞受賞者も生み出したのである。

午後は、日本の有名大学の一つである京都大学を訪問した。アジアひいては世界でも著名な高等教育機関として、京都大学は数多くの優秀な人材を輩出している。幸いなことに、今回私たちは京都大学の学生たちと交流することができた。私たちはまず校内の見学をし、その後教室で「中国と日本の就職状況」というテーマで討論会を行った。中国では大学四年生の時に論文を完成させなければならないので、大抵の場合論文を準備しながら企業研修を受

けることで、はじめて卒業後の職が保証される。しかし日本では、一般的に大学三年時に就職先を見つけ、一年後に大学を卒業した後はそこへ就職することができる。日本では大学新卒生があまり多くないので、彼らは幾つもの企業で採用面接に臨む機会があるが、中国の学生はほとんどの時間を企業への履歴書送付に費やしている。さらに、日本人は転職をあまり好まず、就職した企業への忠誠心が強い。日本人のこうした気質は見習うに値する。晩餐会が終了した後、私たちは準備していたプレゼントを贈り、名残を惜しみつつ別れを告げた。

日 付：5月27日（月）2日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：胡承蓉

今日の午前から京都での見学が始まった。バスからでも私たちは京都建築の特徴を感じることができた。家屋はどれも低く、悠久の歴史を持つ由緒ある古都である。徳川家康にまつわる史跡を通じて、明治時代の遷都の歴史や京都という地名の由来について知ることができた。

午前は島津製作所の見学に出かけ、日本の科学技術の先進性を実感した。島津製作所の分析および試験計測機器そして医療設備は、日本の先端科学技術の結晶であるだけでなく、全世界の人々に対しても多大な貢献をしている。この場を借りて、四川での二度にわたる地震の際の、島津製作所の被災地住民への設備援助に感謝申し上げたい。島津製作所の見学で最も印象深かったのは、初代島津源蔵氏、二代目島津源蔵氏そして田中耕一氏という三人の伝説的人物の歩みと功績だ。彼らは時代こそ異なるが、科学に対するひたむきさとたゆまぬイノベーションの精神は彼らすべてに共通している。杜さんの解説の中でも、田中氏の日頃の仕事に対する細部へのこだわりを通してノーベル賞受賞の必然性が述べられていた。これはまさに以前教師が私たちに語ってくれた「細部が勝敗を決する」という言葉を証明したものである。

午後の京都大学での交流では、学生たちから熱烈的な歓迎を受けた。私たちは彼らと共に日本語、英語、中国語の3つの言語を使って6つのテーマに沿って討論会を行った。我が団員の中にも優秀な人材がいて、みんな独自の観点から意見を述べ、最後にはお互いの感想を分かち合うことができた。京都大学の紹介を聞いていた時に私が特に注目したのは、大学が発表した論文の引用率の高さだ。彼らの論文は信頼性が極めて高く、データや観点の一つひとつに至るまで正確さが保証されている。私も中国で時間を惜しまずに100編近くの論文を読んだが、それらの質は京都大学の論文と比べるとまだまだ足元にも及ばない。私も今後大学院に進学した後、彼らの研究姿勢に倣いたいと思っている。夕食の後、私たちは一緒に歌い、プレゼントを贈り、そして一緒に写真を撮るなどして、この日の日程を終えた。

日 付：5月28日（火）3日目

大学名：中国農業大学

氏 名：顧燁

今日はまず嵐山にある周恩来総理の記念碑を見に行った。周総理の「雨中嵐山」の原文が刻まれた大きな石碑は限り無い歴史の重みを感じさせ、同時に私たちの周総理に対する敬意が再び呼び覚まされた。呂さん帯同の下、私たちは周総理を偲ぶ儀式を行い、皆は周総理への想いをしとしとと振り続ける雨に託した。

続いて、私たちは金閣寺を訪れた。これまで写真でしか見たことがなかった実物の金閣寺は荘厳で美しく、何度見ても飽きることがない見事な景観を呈していた。私たち以外にも、ちょうど日本の小中学生の団体が見学に訪れており、学生服に身を包んだ大勢の男の子や女の子は活発でかわいらしく、元気で満ち溢れており、景観に彩りを添えていた。

昼食の伝統和食は種類が豊富でどれも非常に美味しく、さらに舞妓による演目を存分に楽しんだ。

午後は引き続き清水寺と高台寺を見学した。清水寺の湧水は非常に甘くて美味しく、高台寺での茶道や座禅体験はとても興味深かったが、私にとって特筆に値するのは、座禅体験だった。浄因法師の指導の下、静かに座禅を組んで呼吸を整えると雑念が消え失せて、心が徐々に穏やかになってくるのを感じた。浄因法師の若々しい風貌とユーモアのある話し方から、座禅は人格を磨き修養を積む助けになるだけでなく、若さを保つ上でも大いに役立つに違いないと思い、座禅をこれからもずっと続けようと決心した。

新幹線はとても速く、京都からわずか一時間余りで浜松に到着した。車内で、私は中国人民大学の学生たちとゲームをして一緒に楽しい時間を過ごし、彼らとより仲良くなることができた。私は自分とは異なる考えを持つ若者たちと交流する感覚を心から楽しんでいて。

日 付：5月28日（火）3日目

大学名：中国人民大学

氏 名：何思源

今日はリラックスした一日だ。荷物を置いてからお気に入りの服に着替えて、小雨が降りしきる京都の街を散策し、古都の醍醐味を味わった。最初は嵐山を訪れた。車から降りると小雨が降っており、女性の多くは傘を差しながら小雨と共に霧が立ち込める嵐山を散策した。美しい景観には必ずと言って良いほど旧跡がある。嵐山の中腹には、周恩来総理の記念碑がひっそりと立っている。霧雨で周辺が霞んでいる中、傘を掲げて故人をしのぶ。日本で故人をしのぶ機会を持つことができたのは実に素晴らしいことだ。最後に、私たちは総理の記念碑の前で三度お辞儀をして、偉大な先人に対して敬意を表した。

次に訪れたのは、金閣寺だ。日本の景勝地はどこもこじんまりとしていて、広さが数平方キロメートルもないが、どの景勝地も優雅で美しい。美しい緑に覆われ、金色に光輝く金閣寺は、重厚な趣を備えた歴史ある寺であり、何もかもが美しい。とりわけ特筆に値する点は、金閣である。金閣は三層に分かれ、至るところに金箔がはりめぐらされており、何百年にもわたって金色に輝き続けている。その頂上に飾られた金色に輝く鳳凰は、金閣寺の古寺としての風格をより引き立てている。

最後に訪れたのは清水寺と高台寺だ。二つの寺が持つ趣の組み合わせは、耽美的なイメージを私たちに抱かせる。住職の主催による茶道体験に、私は日本が古来より育んできた「道」の真髄を間近で味わうことができた。その作法、美しさ、優雅な補佐役の女性、そして冷たく爽やかな緑茶の風味、このひと時は、まさに無上のものだ。

日 付：5月28日（火）3日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：鄧沛捷

丸一日かけて古都である京都を観光できるのは、本当に幸せなことだ。丁度雨が降り、霧が立ち込めている様は、「南朝四百八十寺、多少楼台烟雨中（南朝の四百を超える寺にある楼台の多くがぼんやりと春雨に霞んでいる）」という古代の漢詩に出てくる情景を彷彿とさせるものだ。

金閣寺は非常に美しく、清水寺も実に素晴らしかった。ただ嵐山がかなり政治化されており、周恩来総理の石碑一つでここまで形式主義になってしまうとは、全く残念でならない。

一方高台寺での茶道と座禅体験はとても興味深かった。日本の茶道は、「清静和寂」を追求し、その心境は「一期一会」である。中国にも「君子之交淡如水（君子の交わりは淡きこと水の如し）」ということわざがあるが、そこにはまさに「清静和寂」の精神が表れている。私利私欲無く、さらに純粋な心、これによりはじめて真の友情が生まれるのである。しかし残念なことに、今の世の中は物欲で溢れ、人は互いに利用し合い、純粋な友情はほとんど見かけなくなってしまった。もし明日世界が終わりを迎えるとしたら、私は最後の一日をどう過ごすのだろうかと思案するが、答えは見つか

らない。「無常」という仏教の概念を持つ日本人も長きにわたりこの問題の答えを模索しているに違いない。もしかしたら「一期一会」こそ答えなのかもしれない。他人との出会い一つひとつを大切に、一つひとつの体験を大事にし、悔いを残さない。こうする事で或いは「死を受け入れる」ことができるのかも知れない。

そして座禅はさらに得難い貴重な体験だった。背筋を伸ばして両足を内側に折るようにして座り、両手を円型に組んで静かに膝の上に置き、精神をこの円に集中するのだ。頭をわずかに下げて視点を一メートルほど前に合わせるとお釈迦様と同じ眼差しになるという。この時に呼吸を整える必要があり、ゆっくりと呼吸を繰り返す。一度の呼吸につき心の中で一つずつ数え、三十まで数えたら、また一から数える。見たところ簡単そうかもしれないが、精神が集中できていないと、いくつまで数えたか忘れてしまうのである。以前は座禅は単なる瞑想だとばかり思っていたが、まさか呼吸のサイクルを保つだけで無の境地に達することができるものだったとは知らなかった。

日 付：5月29日（水）4日目

大学名：清華大学

氏 名：楊思謙

今日は訪日4日目、これまでで最もリラックスできた。なぜなら今日の晩はゆっくり温泉に入ることができたからだ。しかし温泉に入るまでは、非常に疲れていた。今日は朝6時半に起床したため、多少寝不足のまま午前中は静岡県農林技術研究所と農林大学校を訪れた。仲間の学生たちが農業について多くの質問をしていることに私は驚いた。なぜなら、私たちのグループには農業を専攻している学生はいないにも関わらず、質問内容は専門的で、また解説スタッフと専門用語を交えながら交流していたからだ。私は皆の博識ぶりに驚きを隠せなかった。もちろんこれは素晴らしいことだ。最近の自分は運が良い気がする。昨日は、和食を食べている時、ちょうど舞妓たちによる演目を観賞することができたし、今日は、農林大学校の学生たちが体操をしているのを目にした。彼らの体操を見た瞬間、私は中国のラジオ体操第Nを思い出した。そして中国と日本の体操の違いを見た。彼らはなんと雨が降ったばかりのセメントの地面で腕立てや腹筋などの運動に一生懸命取り組んでいたのだ。その後私たちは、農業大学二年生の学生たちと花摘みを体験した。咲いた花を摘む作業だが、摘んだ花は二つで成功率は100%、少し嬉しかった。

昼食の後、ハウス食品の製造工場を訪問し、工場内の現代的な生産ラインを見学した。工場では先端技術が取り入れられており、生産されている主な商品はカレーで、幅広い人々の好みに応じた多種多様なカレーがあった。中国人にとっては食べ慣れない不思議な味わいで、あまり口に合わないと思った。しかし工場からカレーを一袋ずつ頂いても嬉しかった。その心遣いに感謝している。

ハウス食品を見学した後は、待ちわびていたリラックスタイムだ。三時間ほど車に乗り、箱根にあるホテルに到着した。車での移動中に本来なら富士山が見えるはずなのだが、残念ながら天気が悪かったので富士山は少しも見えなかった。今後の日程で富士山を見る機会がある事を願っている。せっかく日本に来たのに富士山が見られないのは、中国に来たのに万里の長城が見られないようなものだ。それは残念以外の何物でもない。

温泉を満喫した後は、パーティーをして楽しく過ごした。事前に出し物を準備できなかったので場当たりのになり、大した思い出になるようなものでは無かったかも知れない。

何はともあれ、今日も一日楽しかった。

日 付：5月29日（水）4日目

大学名：中国人民大学

氏 名：江天雨

どの国においても、農業は最古であると同時に最新の産業だ。なぜ古いかと言えば、農業の起源と人類の営みは常に密接な関係で結ばれており、農業の発展は、太古からの人類文明の発展史を物語るものだからだ。またなぜ最

新かという、現代の工業社会において、農業は依然として最先端科学が注目する分野であり、今日、農業は日進月歩の発展を遂げ、新方式や新技術が農業に新たな命を吹き込んでいるからである。

日本は小さな島国であり、土地や資源は乏しいが人口密度は高く、山地面積は比較的広い。それゆえ、日本では農業をいかに発展させるかが重要な課題となっている。今日の静岡県農林大学校および農林研究所の訪問を通じて、限られた資源の有効活用こそ農業生産力の最大化における鉄則だということを強く認識した。例えば、メロンを植える際には同時に養蜂も行い、蜂蜜という副産物だけでなく、人の手を使わず効果的に花粉を媒介させることができる。茶葉の栽培は、山が多い日本の地形に適しており、国にとって大きな収入源となっている。

私は政治学が専攻なので、農業分野の技術的な問題についてあまり明るくないが、静岡の農業に対する考察が今日の日記のメインテーマとなったのは、効果的な制度の活用によってどのように農業や経済の成長を保障するかという自身の専攻学問への思考を促してくれたからである。農林大学校および研究所の訪問中、農業支援の問題について教授は、農家への支援は一連の制度保障に依存しているが、中央政府から地方自治体にかけて複雑に構成されていることに言及した。これには私は中国の行政制度の農業への制約について考えずにはいられなかったが、私は中日両国間の具体的な制度上の相違についてより理解したいと思うようになった。「学思並進(よく学びつつ熟考する)」とは恐らくこういうことなのだろう。

日 付：5月29日（水）4日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：銭童

今日、私たちがまず訪れたのは静岡県にある農林技術研究所だ。郊外に位置しているので、現地に到着して車を降りると新鮮な空気が辺りに満ちていた。研究所の職員から静岡県の農業について説明を受けた後、温室と主要作物の生育状況の見学に行った。国内で主に採用されている生産と研究を組み合わせるスタイルとは異なり、この研究所では専ら研究に重きが置かれている。土を使用しないバラの栽培や丈夫で真っ直ぐに育つガーベラ、「静育一号」と呼ばれている高級メロンは、すべて非常に印象深いものだった。日本では環境保護や節約の意識が至るところまで浸透しており、農業も例外ではない。研究員たちは農作物のさらなる品質の向上や賞味期限の延長のみならず、農薬使用の削減と生物を使った害虫駆除方式による病害虫予防を研究している。このことは強く印象に残った。

次に向かったのは、今日私たちが一番楽しみにしていた箱根温泉だ。日本の温泉の故郷という名にずっと憧れを感じていたが、今日ついに念願がかなった。「天成園」に到着後、目の前に広がる光景に皆興奮した。早速部屋に入って浴衣に着替え、今晚の「特別イベント」に胸を躍らせた。この夜は私たちの期待通り楽しいものとなった。美味しい懐石料理に加えて、各大学の学生たちが、それぞれバラエティーに富んだ出し物を披露し、皆を驚かせてくれた。この時ある学生の「このような豪華な温泉旅行は、今後お金を貯めればまた体験できると思うが、今日のように六つの大学の仲間たちと一堂に会して楽しく過ごせる機会は、或いはもう無いかも知れない」という言葉は私の心の琴線に触れた。パーティーが終わると、気分が大いに盛り上がっている私たちは、一緒に温泉に入ることにした。「裸の付き合い」にはとても気恥ずかしく感じたが、皆で一緒に露天風呂に入るとすぐに気にならなくなった。温泉につかって一息つくと、心と身体が一新されたような気がした。

次回訪日した時も温泉には必ず立ち寄りたいと思う。

日 付：5月30日（木）5日目

大学名：中国農業大学

氏 名：王珏

日本での充実した旅行も5日目を迎え、狭い路地や挨拶時のお辞儀、きれいな空気にも慣れた。日本は実に住み

心地が良い国だ(仕事上の重圧さえなければの話だが)。この数日間の見学を通じて最も印象深かったのは、日本人がいかに効率よく資源を活用しているかということである。限られた資源が日本人にリサイクル意識と他人(公共)への思いやりを形成させたのである。

その事実を証明するかのように、まさに今日私たちが見学したテルモと住友商事はCSR(社会貢献活動)に力を入れている。両社はいずれも長い歴史を有し、世界的な規模と華々しい業績を誇っている。両社のこうした特徴と彼らの持続的発展の維持は、きっと大きく関係しているに違いない。そして、私は今日初めて総合商社について学ぶことができた。日本独自の企業形態だが、経済を専攻していた私も総合商社については理解していなかった。総合商社は日本経済の成長を支える役割を担っている。その総合性によって、各業界の架け橋となって一体化を実現したり、海外市場を開拓したり、また世界環境の変化にも順応している。私は、総合商社が日本独自の形態であることは日本の体制や文化とは切り離して考えられないと思う。日本人は自発的に国の発展という視点にたち、国全体の利益を考えることができるのに対して、中国では国が企業(特に国営企業)のために考慮することの方が、企業の国に対するそれよりも断然に多い。私はこの点を中国企業は日本企業に学ぶべきであると思う。

そして住友商事は「飲水思源(水を飲む者は、その源に思いを致せ)」という理念を掲げている。これはつまり一種の感謝であり、自己反省の態度である。企業であれ、国家であれ、また一個人であれ、私たちはみなこのことを肝に銘じ、くれぐれも忘れるべきではない。

日 付：5月30日(木) 5日目

大学名：中国農業大学

氏 名：費書朗

昨夜も遅くまで忙しかったが、今朝も頑張って6時半に起床した。なぜならこの山間部に位置するホテルと周囲の景色が実に美しいので、少し早めに出かけて写真を撮りたかったからだ。このチャンスを逃してしまうと今後こんなにきれいな景色に再びめぐり合える機会は訪れないかもしれない。だからこそ今、この時を大切にしたい。

午前中はテルモを見学し、彼らが開発した最先端医療シミュレーション施設について理解を深め、さらに手術の疑似体験をすることができた。日本企業に対して私が強く印象に残ったのは、彼らが物事の細部まで重視しているところだ。ヒューマニティーに富み、利用者各々に対して配慮がなされている。例えば、テルモ製の注射針は、引き抜く際に蓋が自動的に閉まるように設計されており、これは処置の際に生じうる看護師への感染を防止するためのものである。テルモによるイノベーションはまさに驚嘆すべきものであり、特に心血管疾患の治療における技術は非常に先進的である。

午後は住友商事を見学した。彼らの業務範囲の広さに驚いた。説明担当者が冗談を交えて、「当社で扱っていないのは麻薬と銃器くらいです」と語っていたが、これほどまでに広い業務範囲をしっかりとカバーできているのは、彼らが管理から技術に至るまですべてにおいて秀でていることの証しだ。彼らの「変化への対応能力を常に維持する」という経営理念は、個人であれ集団であれ、社会で生き、発展を遂げる上での真理を物語っている。

住友商事の見学で最も印象に残ったのは晩餐会で、住友商事に勤務している中国人社員が私たちに同伴してくれたことだ。彼らはみなプロ意識が高く、とてもフレンドリーだった。異国の地で同胞の友人と一緒に食事をしながら歓談することができ、私は気持ちが高ぶっていくのを感じた。私のそばにいる王建偉さんは来日して25年になる。長年の共産党員である上に、聞いた話によると現在の中国外交部の部長が当時、共産党へ入党する際に彼が紹介人を務めたそうだ。彼は優しい物腰でこの数日の活動や日本に対する印象などについて尋ねてきた。私たちが日本に好感を持っていることを伝えると、彼は日本と中国の差を見て祖国を否定したりしないようにと忠告してくれた。それを聞いて私はすごく感動した。なぜなら私もこの数日の間に同じことを考えていたからだ。私たちがこうして訪日している目的は、日本を知りつつ日本と中国の差が何かを見分けて熟考し、祖国の発展のために貢献することだ。今日、テルモで職員の方々と交流した時、彼らは「日本も2, 30年前ひいては10年前でさえ今ほど環境は良くなかった」と言っていた。

発展の途上において模索せず前に進める人などいるだろうか？こうして私は、今の中国が発展の途上で直面している問題も今後の発展のためには避けて通れない一過性の問題に過ぎず、発展の先には輝かしい未来が待っているという確信が得られた。

日 付：5月30日（木）5日目

大学名：中国人民大学

氏 名：趙曉晴

Day5@東京

今日一日が終わって、突然医学を学びたいという衝動にかられた。今日の体験は実にいつもとは違うものだった。これまでの企業訪問はただ見学のみだったが、今日はテルモで機器の操作を体験することができ、見学はより忘れ難い思い出になった。

模擬体験の際に、初めて「看護師」になって「患者」に注射を試みたが、一発で成功した。また初めて心臓血管手術を生で見た。もちろん手術の対象は人体ではなくブタなのだが、それでも私にとっては非常に衝撃的だった。そして思わず考えさせられたのは、日本で患者の痛みを減らすためのさまざまな方法が研究開発されている時にも、中国では、有名な病院を含むほとんどの病院で激痛や大きな危険が伴う手術が患者に施されているという現実である。

資金力や技術力において、私たちの国は先進国である日本と比べて多少の遅れをとっているとは思いますが、その主な原因は科学技術に対する理念に起因しているのかもしれない。同時に、その資金力や技術力と科学技術に対する理念のどちらにおいても重要な、創造力や実践力の差についても深く考えさせられた。

今日の晩餐会で、日本の企業の方々や、東京での私たちの滞在がより楽しいものとなるように、美味しい食事と美しい景色を私たちのために準備してくれたことに感動を覚えると同時に、どんなことにも真面目に取り組む彼らの姿勢にも驚かされた。

お酒をたしなみながら東京の美しい夜景を楽しんでいると心が落ち着き、とても気持ちが良かった！

P・S 今日テルモでホストファミリーの西山さんに会った。本当に良い人で、中国語も上手。ホームステイへの期待がますます高まった！

日 付：5月31日（金）6日目

大学名：中国農業大学

氏 名：凌晨

今日のメインは三井化学と新日鐵住金君津製鉄所という大規模工場の見学だった。今日の見学を通じて日本の工業の発展ぶりと現状を深く知ることができた。もちろん日本が発展を遂げた理由について自分なりに分析してみた。

最初に私たちが訪問したのは三井化学市原工場だ。この工場では、主にエチレンとエチレン派生物から化学工業材料を生産している。工場自体は東京湾の海辺に位置していることから交通や輸送の便が非常に良い。全体的に強く印象に残ったのは、三井化学の協力姿勢とイノベーション、もう一つは生産面での安全と環境保護に対する高い基準だ。まず前者について触れるが、市原工場内では三井が経営母体の会社と合資による会社の両方が存在しており、互いに発展しつつも友好的な関係を維持している。このような経済的で効率的な生産配置は、私たちが学ぶべきところだ。また後者においては、工場の建設以降現在に至るまで事故は一度しか発生していない上に、有害なガスや液体の排出はゼロに近い。これには感服させられた。

新日鐵住金の見学は、過ぎ去った歴史をしのぶ興味深いものだった。私たちが歩いたルートは、まさに当時、鄧小平が見学した時のルートであり、彼が新日鐵の工場を見学した時に覚えた感慨を私たちは想像してみた。この工場を見学した時、きっと彼は科学技術面での中国と日本の差を痛感させられたことだろう。しかし今日の見学を通じて私た

ちが痛感させられたのは、企業の社会的責任に対する自覚の差だ。現在の中国は大きな企業も高い科学技術力も有しているが、社会的責任に対する自覚が欠如している。中国が現発展段階からいかにして更に一段階上がることができるのか、日本企業は私たちの模範であるといえる。

日 付：5月31日（金）6日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：陳亦行

化学はかつて私の興味の対象であり、そして夢だった。化学反応を通じて一つの物質が別の物質に変わり、透明な液体が色とりどりに変化し、様々な匂いを発散し、自然に発熱や降温をする・・・私たちが生活の中で使用する材料にはいずれも化学的性質があり、それはすべての人に個性があるのと同じだ。三井化学は夢の工場のように原料を多種多様な製品に変幻させ、様々な特性を持たせる。また新日鐵住金工場は銑鉄を鋼に製錬する場所だ。そのままで使えない銑鉄を精錬して様々な鋼材にするのは、本当にすごいことだ。

しかし、私が化学工業への夢を諦めたのは化学工場の環境が一般的には身体に有害で、慢性病を患うことを恐れたためである。それは一種の目に見えない悪魔で、匂いだけでも人をたまらなくさせる。しかし、三井と新日鐵住金はいずれも従業員に対して100%の責任を負っており、効率的な休暇と交替出勤制で長時間の有害物質との接触を避け、また定期的な健康診断を行っている。特に新日鐵住金の現場従業員に対する2週間に1回の検査は非常に高い頻度だ。そして緊急事態が発生した時のために、緊急用救急車も用意されている。こういった様々な保障にも日本人の真面目さと、人命を最重視する考え方が表れている。

日 付：5月31日（金）6日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：潘璟

早朝車に乗り、東京から千葉県にある三井化学を訪れた。東京湾の景色は現代的な科学技術とマッチし、石油から各種の化合物生成プロセスまで、私はここが単なる工場であるだけでなく、企業の発展の縮図でもあることに気付いた。製造コストから物流、更に市場での販売まですべてが非常に完備されており、非常に興味深かったのだが、長ズボンを履いていなかったため工場を見学できなかったのは実に残念だった。

三井化学が私たちのために心をこめて用意してくれた昼食をいただいた後、午後は新日鐵住金を訪れた。ここは住友グループと共同出資した企業だ。私たちは専用の作業服に着替え、ヘルメットを被り、鄧小平もかつて視察した道を歩いて、工場の実際の製造ラインの作業プロセスを見学した。作業場の温度は非常に高いが、外は私たちが初めに思っていたほど熱かったり、あるいは濃い煙が充満しているような事は無く、非常に緑化が行き届いていて、多くの小学生と一般人が見学に来ていた。私たちも構内機関車や高炉の前で写真を撮った。北京798芸術区に比べるとよりリアルで、更に心を打つものがある。そしてここでは廃棄物のリサイクル、汚染防止、そして発展と同時にヒューマナイズされた環境を絶えず追求し、自然を守り、調和した発展をするといった多くの啓発を私たちにもたらした。

夜に私たちは銀座に行き、ビュッフェ式の焼肉を食べ、都心商店街の賑やかさを体感した。そして訪問日程も半ばを過ぎ皆はますます仲良くなり、食べながら雑談したりと非常ににぎやかだった。夜の東京は涼しい風が吹いていた。私たちが一緒に異国で過ごしたこの数日のことは、永遠に忘れないだろう。

日 付：6月1日（土）7日目

大学名：中国農業大学

氏 名：聶車暢

今日は一日非常に楽しんだ。私はとても良い家族に出会った。優しく賢いお母さん、温厚で博識のお父さん、美しく開放的でアメリカの少女のようなエリナ、格好良く頭の良いトモヤ、それから14歳の可愛いCOZY。この一家がとても好きになった。

私がホームステイするこの家庭は典型的な日本家庭ではない(not very Japanese)。9歳の時、彼女たち一家は米国に引っ越し、その10数年後、やっとまた日本に帰り、大阪や京都に2年間住み、東京に来てからはまだ2年経っていない。だからエリナはちょっとアメリカナイズされている。

午前にお母さんとエリナが私を迎えに来てくれた。私たちは先ず原宿に行き、そこで喫茶店に入って行動予定を計画し、その後長い表参道を歩いて、渋谷区の明治神宮を訪れた。その間に多くのお店をのぞき、気に入った小物を買うことができた。多くの工芸品店の品物は、皆とても精巧で民族色に富み、とある「キャラクター」ギフトショップにはたくさんのアニメのガレージキットがあり、最も私が引きつけられたのは眼鏡の形になったカメラで、携帯に便利で見た目も良い。

4時になると、お母さんは先に地下鉄に乗って帰宅し、私とエリナは浅草に行った。浅草寺は中国のお寺とはスタイルが全く違い、黒と赤が寺院の古風な質朴さと重厚さをより引き立たせている。スカイツリーは浅草から非常に近いので、エリナは私を連れて上空から東京の全景を見せようと考えていたのだが、お母さんが私たちに6時前に家に戻るよと言っていたので、私はできるだけお母さんを心配させないようにと、地下鉄に乗ってエリナの家に行った。

目黒区の一戸建ての家並みはアニメの中から飛び出して来たようで、狭い路地、低い門、2階あるいは3階建ての小さな建物は精巧でコンパクト、それが私の第一印象だった。

日 付：6月1日（土）7日目

大学名：中国人民大学

氏 名：趙歆悦

期待、緊張、興奮などが入り混じった中で、私たちはホームステイの日を迎えた。

朝、私たちは早々と起床し、荷物を片付け、皆で一緒に日中経済協会を訪れた。会議室の中で、私たちは売り出される商品のように、ホームステイ先の家族が私たちを迎えに来るのを待っていた。その時、誰かに迎えが来る毎に、他の人たちは拍手しながら、心の中では「私にはいつ迎えの人が来るのだろう」と指折り数えていた。それから50分ほど経って、やっと私はホームステイ先の高橋さんの迎えを受けた。

高橋さんのお宅は秋葉原近くの千代田区にある、4階建ての一軒家だった。実を言うと、高橋さんの家に着いたばかりの時、私はこの東京の賑やかな場所にある4階建ての一軒家に驚き、心の中では「こんなにお金持ちの家庭だと、なかなか付き合い難いのではないだろうか」と考えてしまったが、その後私は余計な心配だったことに気がついた。高橋さん一家の生活は豊かだが、細かなところでは、やはり彼らの節制と控えめさを感じることができた。高橋さんの奥さんは日本に定住した中国人だったので、意思疎通で言葉の障害は全く無く、これは私にとって非常にラッキーだった。

本格的な日本式の昼食を体験した後、高橋さん一家は私を浅草と台場に連れて行ってくれた。台場に着いて、私は初めて世界には3つの自由の女神像があり、しかもその1体が日本の東京にあることを知った。万卷の書を読み、万里の道を行くという言葉のとおり、自ら体験すれば予想外の多くの知識が得られるものだ。

夕食は高橋さん一家が台湾式しゃぶしゃぶ鍋を食べにつれて行ってくれた。中国式のしゃぶしゃぶ鍋なのだが、とても美味しかった。

今日、高橋さん一家の控えめさと親切さに触れ、台場の美しい景色、台湾式しゃぶしゃぶ鍋の美味しさ、これらすべてが私の旅の特に忘れ難い「財産」になった。

日 付：6月1日（土）7日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：李佳玉

今日はホームステイの日だ。朝から、私は複雑な気持ちを抱いて集合場所に向かった。なぜなら私は生まれてから、他所の家に泊まるのはこれが2回目だったからだ。私は小学生の時に友達の家で1回泊まった以外、これまで一人で知らない場所に行き、他所の家庭に泊まったことは無かった。だから、両親も非常に心配していたし、私自身もとても緊張と不安に駆られていたのだが、同時に日本の一般家庭の生活を体験できることに非常に期待もしていた。

午前9時過ぎ、澄川さん一家が私を迎えに来た。彼らは私を連れて東京都内の観光に出かけ、そして浅草寺を見に行った。当初から澄川さんは私に気楽に、細かい事を気に掛けず、緊張しないでとずっと言ってくれたことに、私はとても感激した。なぜなら私の性格は多少内気なため、会ったばかりの人に対してどのように接したら良いかも分からず、それで少し緊張していたからである。しかし澄川さん一家はとても親切で心優しく、すぐに私は安心することができ、そして私はすぐにこの一家が好きになった。これが私の一番印象に残った部分である。

またスカイバスに乗って観光した時に、私は澄川さんと色々おしゃべりして、東京の状況についてより理解を深めることができた。澄川さん宅への帰り道で、私は一家と一緒に夕食の食材、朝食のパン、銅鑼焼きなどを買った。東京の有名な「ウサギ屋」にも行った。その他に、JR中央線に乗ったり、また夕食でタコ焼きを食べたりと、私にはすべてが初体験でとても楽しく、貴重なものだった。

一日の中で、私が最も印象深かったのは、やはりこの家族の誠実さと親切さだ。これには、カルチャーギャップが狭まっているのを実感した。人と人の心の交流こそが最も大切だと思った。

日 付：6月1日（土）7日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：蒙宛璐

今日は朝早くから興奮した気分で日中経済協会を訪れた。私のホームステイ先の家族は比較的早く来たので、私が出発したのは3番目だった。ホームステイ先の家族に会うまで、私はとても緊張していた。中国で初対面の人の家を訪問するのでさえ私はとても緊張するのに、まして今度は異国で日本の人の家を訪問するのだからなおさらだ。だがホームステイ先の金清優子さんと彼女のお父さんの金清博文さんの顔を見て、私はすぐにリラックスできた。先ず私たちは電車に乗り、上野公園近くの文化センターに行った。文化センターで私は科学博物館、風俗博物館、また文化芸術館を見学した。科学博物館内の3Dによる人類の起源を紹介する展示室はとても印象深かった。その後、上野動物園で私は生まれて初めてジャイアントパンダとシロクマを見る事ができた。昼食は串焼きだった。昼食後に私たちは表参道でお母さんの金清典子さんに会い、お母さんは私たちと一緒に原宿の竹下通りに行き、その後、私と優子お姉さんは明治神宮に行った。そこで私たちは滅多に見られない日本の伝統的な結婚式を見ることができた。渋谷では、私は最も行きたかった交差点を探し当てた。夜には金清さん宅でお母さんが作った美味しい鶏の唐揚げを食べ、食後は中日両国の違いについてたくさんの事を語り合い、楽しい一日はこうして過ぎていった。

日 付：6月2日（日）8日目

大学名：清華大学

氏 名：楊月

眼を開けると、そこは見知らぬ、しかし温かな雰囲気の部屋だった。見慣れない部屋ではあるが、家庭特有の温もりの雰囲気に満ち溢れている。9時までたっぷりと寝て、この数日で費やした体力を補充した。朝食の食卓では世間話をし、お父さんが語る台湾での生活と日本の習慣の話を聞き、まるで時空を越えて普通の日本の高校生の身体に乗り移ったようで、この全てがごく平凡な日常そのものだった。

その後、お父さんが車で私たちを浅草まで送ってくれ、途中ではわざわざ回り道をして、私たちに東京タワーを撮影させてくれたり、東京湾を見せてくれたりと、その思いやりには本当に感動した。浅草には目が眩むほど様々な小さなお店があり、私は思い切って家族や友人へのプレゼントをたくさん買い込んだため、昨日からの出費の合計が1万円以上に達してしまった。物価の上昇により、お金はますます値打ちが無くなった事を嘆きながら、やはり儉約に努めて、不必要な出費を避けなければと思った。浅草と浅草寺に別れを告げ、私はまだ古典的な静けさの雰囲気の中に浸りつつ、スカイツリーを訪れた。ツリー全体が銀色に燦々と輝き、雄壮にそびえ立ち、ツリー内のショッピングセンターはまた黒山の人だかりで、様々な軽食、玩具、記念品があって、女性にとっては中へ入ったら2時間は出て来られないのだが、残念ながら時間が迫っていたため、帰りの電車に乗らざるを得なかった。

ホテルに帰ると買ったプレゼントを片付ける間もなく慌ただしく一階に降り、聖地巡礼のような気分で秋葉原に行くのを待った。移動中、私はホームステイ交流会の話に完全に入り込むことができず、また呂さんの説明を聞く余裕もなく、目的地に着くと喜び勇んで下車し、学友を引き連れてあちこち歩き回ったのだが、いざ買い物の際は逆に何から買えばいいか分からなくなった。

様々な訪問や見学日程が続く中、この2日間はやっと十分な休息がとれ、日本の日常生活と習慣を深く体験した。今夜はインスタントラーメンを食べたのだが、これが意外にも非常に美味しかった。今後の残り少ない日々で、私の日本での経験もますます充実し、そして多彩になることだろう。

日 付：6月2日（日）8日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：馬博飢

私のこの2日間は驚喜の連続で、ホームステイの2日目に、私は菅納さんが私のために用意したもう一つのプレゼントである関東企業剣道選手権大会を見に行った。私は自分が武道館でこのようなハイレベルの試合を見ることができるとは思ってもみなかった。午後、私たちは江戸東京博物館を見学した。江戸から東京への歴史の変遷について理解し、そして集合の時間となった。

この2日間で、私は家庭の温もりを体感し、菅納さんが私のためにわざわざ準備してくれた興味深い観光コースは、私の多くの願望を現実にしてくれ、そして菅納夫人の行き届いた配慮は、更に私に自分の母親を思い起こさせた。菅納夫妻の2人の息子さんたちはいずれも別の都市で就学と就職をしていて、菅納夫人は私と朴先輩の訪問はまるで2人の息子たちが帰って来たようだと言っていた。2日間の時間は長くはなかったが、とても貴重だった。

菅納さんは1日目の夕食の前に、入念に保管していた大学生訪日団報告書を見せてくれたが、それは先輩たちの回のものだった。私は菅納さんがこの日記をご覧になるかどうか分からないが、もしその機会があるなら、一言言わせて下さい。「たいへんありがとうございました。私のために準備していただいた東京の旅を私は一生心に刻みます。もし私が日本に留学に来ることができたら、またお邪魔させて下さい。」

日 付：6月2日（日）8日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：関夢露

私を受け入れてくれた日本の家庭は、いつもこのようなホームステイを受け入れている家庭だった。だから何をするにしても、彼らは非常に経験が豊富だった。私が何を買いだたいか伝えと、彼らは非常に良く理解してて、また私に以前の人たちが何を買ったかも教えてくれた。しかし人にはそれぞれ違ひがあるように、それぞれの希望もまた違ひてるので、毎回の受け入れは新しい体験であるのだと云う。

今日の触れ合ひの中で、私は日本人と中国人ではやはり多くの違ひがあることに気付いた。比較的に細部にこだわらない中国人と、きめ細かな日本人は、同様にお客さんに対してちょっとした不満を言うことは無い。しかし日本人は相手に自分の習慣がどのようなものかを間接的に知らせる。また、受け入れることができる事については沈黙を守る。

その後、彼らは私をホテルまで送ってくれ、私たちは秋葉原でのショッピングツアーを開始した。秋葉原も、その隣の御徒町も、私は非常に特色があると思った。オタク男性と電器の秋葉原は、テレビで見た日本を如実に感じさせた。そして御徒町は雑貨の集散地に似ててゐる。ここは私が中国で全く知らない、また関わったことも無いところだった。私は「日本」にもいろいろな業種があり、それぞれ自らの特色を持って1つの国を形成してゐるのだと思った。中国と同じように、すべての人々には皆違ひたニーズがあり、そしてそのようなニーズを満たすために、特色ある様々な業種が生まれるのである。

日 付：6月2日（日）8日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：銭童

今日はホームステイの2日目だ。前日の夜はお父さんたちと遊びに行くコースを相談した。日程の最初は千葉県北部にある「房総のむら」だ。そこは江戸時代の武士と農民の生活風景と建築を再現した風景村で、またしばしば大河ドラマの撮影地にもなっている。そこで私は伝統的な菓子作り、ろうそく作り、下駄とかんざし作りを見学し、また武家屋敷の中では昔のお姫様の服装を試着した。情景を完全に再現しているため、その中に身を置くとまるで昔の江戸に戻ったようだ。他の観光地とは違ひて、ここは昔の文化を保護し、より多くの人々に昔の農民と武士の生活を理解し体験してもらうことに重きを置いているため、各種の体験料金も非常に安い。今後千葉県にホームステイする人がいれば、ここはとてもお薦めです！

午後、私たちは「ワンダー・グー」という巨大ショッピングセンターに行った。巨大ショッピングセンターと云うのは正にその通りだった。そこでは様々な思いもよらないような商品が一緒に売られており、私は以前最も好きだった漫画の本をかうことにした。しかし、私が別の物を見ている間に「お父さん」がすでにお金を払ってて、私へのプレゼントだと言ふ。池田家に泊まった2日間には、このような驚きと喜びがたくさんあった。

最後に私たちは車で浅草寺に向かった。あの有名な「雷門」の二文字を見て、私は感激を覚えた。だがその後で携帯電話の電池切れに気付き、おまけにカメラは車の中・・・これは現時点での「人生最大の遺憾」の一つになってしまった。でも私は浅草で「大吉」のおみくじを引き当てたので、早く運が向いて来るよう願いたいものだ。

2日間の時間は本当に瞬く間に過ぎ去り、お付き合ひした時間はとても短かったが、池田家のお父さんとお母さんの私への親切なもてなしには本当に感動した。今後また日本を訪れ、お二人に再開する機会があるよう願う。

日 付：6月3日（月）9日目

大学名：清華大学

氏 名：李健

みずほコーポレート銀行と早稲田大学

午前のみずほコーポレート銀行での解説は、私のように銀行の経営モデル、日本の政策や国情に疎い理工系学生にとっては本当に理解が難しく、「アベノミクス」と日本経済の解説は本当に奥が深く、その中の原理は全く理解できないどころか、逆に自分の中で多くの問題が生まれた。

午後の早稲田大学との交流は非常に常識を超えていて、先ず初めに一人の風変わりな先生が全く何の紹介もせず、私たちと多くの話題について討論し始め、私たちに早稲田大学の理解し難い大学運営理念と人材理念をたくさん語ったのだが、しかし私は教授の終身制、また論文数によらない教員の査定方法には好感を持った。質の高い論文の発表は数年あるいは数十年の努力が必要であり、本物の科学者が取り組むのは正に「三年鳴かずとも、一鳴きで世間を驚かせる」プロジェクトである。それに対し中国国内の学术界は極めて名利を求める風潮が強く、教授の名のためにどうしても大量の論文を発表しなければならず、論文の質はおろそかにされ、本当に質の高い論文は国内では非常に少ない。

同時に、得るところが大きかった言葉がある、それはすなわち責任を負った自由という言葉で、私に自由の二文字を再認識させた。1990年代生まれの世代として、私たちは自由が必要だと常に叫んでいるが、自由を追求しようとして、逆に自由の前提となる責任を負うことを忘れがちである。責任を負わない自由は一つの災いである。自由は必要だが、それ以上に責任を負うことを学ばなければならない。「責任を負った自由」は最も中国の若者に教えるべき観念である。いったいどれほどの中国人が自由を追求する際に自分を見失い墮落していったことか、またどれほどの中国人が自由を追求する際に他人（特に自分の身内）を傷付けたことだろうか。現在の中国の多くの問題は詰まるところ、そのほとんどが国民の責任感の喪失、責任を負いたがらない、結果に対する責任を負おうとしないことに起因している。「責任を負った自由」の考え方を小さい頃から子供に植え付け、このような考え方を国民の脳裏に根付かせ、さらには血液に浸透させなければならない。

日 付：6月3日（月）9日目

大学名：中国人民大学

氏 名：陳樊駿

銀行は多くの数学、金融を学ぶ学生が夢に描く勤務先だが、今日の企業見学は日本の著名なみずほ銀行だった。銀行業務の特殊性ゆえに、実際に銀行の具体的業務を見学したわけではなく、会議室で関連する紹介とセミナーを聞いただけだった。しかしごく短いセミナーで私たちが得た収穫は多く、みずほ銀行の研究部門はデータの収集、処理と分析を通じて、日本の経済状況と関連経済政策を詳細に解説し、私のような金融専攻でない学生も多くを学ぶことができた。

みずほ銀行に別れを告げ、私たちは名門早稲田大学を訪れた。早稲田大学の教師や学生たちとの交流の中で、私たちは早稲田大学は非常に自由な大学ということがわかった。例えば、正門や塀が無い、成績への規定要求が無い、学生サークルは3,000余りに達し、しかも大学の拘束を受けない、学生自治会が大学に反対する立場をとっている等々。中国の学生からすると非常に不思議だが、彼らとしては、これらはみな全く当然のことなのだ。その他に、教員に関するいくつかの事柄にも驚かされた。第一に早稲田の教員の給料は年齢で決定され、役職とは関係が無く、しかも研究経費も無いこと。第二は教員がいったん雇用されると、大学には解雇の権利はない、つまり終身雇用制だということだ。

私たち中国の教育体制は異なり、置かれている環境も異なるため、日本あるいは欧米の教育体制からそのまま学ぶことはできないのかも知れない。しかしいくつかの遅れをとっている点については考え、討論するに値すると思う。絶えず考えて積極的に取り組んでこそ、前進を続けることができるのである。

日 付：6月3日（月）9日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：徐晨琛

午前中に私たちはみずほ銀行を見学し、ここでは行員が2つの方面から銀行を紹介した。先ず銀行の業務および中国関連の状況で、その後、安倍内閣の経済政策を分析した。この全過程で銀行側は私たちのために丹念に中国語資料を用意していたことには、十分に同銀行のヒューマニティーが表れていた。紹介を通じて私はみずほ銀行について初歩的に理解し、そして安倍内閣の経済政策とその目的に対してある程度理解した。見学後、銀行側は豪華な昼食会を設けて私たちをもてなしてくれ、昼食の席では同銀行のスタッフと更に踏み込んだ交流をし、深い友情を結ぶことができた。

昼食の後、私たちは車で早稲田大学を訪れた。先ず大学のシンボルの建築を見学し、続いて大学の先生が私たちの質問に回答し、先生の口からは早稲田には教員評価基準が無く、早稲田に入りさえすればそれはつまり最も優秀だという話を聞いた。早稲田大学は学生に授業への出席を強制せず、最良のリソースを学生に提供している。これらの自由な学風は私たちには欠けているが、かといってすぐに実施できるわけでもない。私たちは自らの実情に基づいて、中国の国情に合った人材育成の道を模索しなければならない。説明会の後、私たちは早大の学生たちと討論を行い、自らの職業計画と少子高齢化社会という2つのテーマについて自分の観点を発表した。討論が終わった後、私たちは一緒に学内の古いレストランに行き、そこで思う存分語り合い、お互いに記念写真を撮り、すばらしい思い出を残した。

日 付：6月4日（火）10日目

大学名：清華大学

氏 名：劉丹陽

今日、最も感激したのは中国駐日大使館に見学に行き、そして大使と交流した事だ。私たちの思い描く大使館はこれまでずっと、とても神聖な場所だったが、今日実際行ってみてやはり印象深いものだった。郭団長は、もし東京に大地震が発生し、10%の家屋しか残らないとすれば、大使官邸はそのうちの一つだと仰っていた。これは大使の地位の重要性を十分物語っている。

そして歓談の際、大使は私たちに日本の経済、政治、文化などの面での基本的状況と中国との関係の発展過程を紹介し、また私たちに対して今回の旅行で日本をどのように見るか、どのような心持ちで学び考えるかについてもご自身の提案をして下さった。そして皆がいずれも非常に興味を持っている中日関係についても語られた。現在、中日双方が直面している障害は、一つは歴史的な問題であり、それには戦争に対する反省、慰安婦などが含まれる。もう一つはすなわち領土問題で、東シナ海の線引き区分と尖閣諸島の問題が含まれ、そしてこれらの問題を解決するには、双方が冷静に対話によって解決しなければならない。現在のような絶え間ない口論は問題の解決には全く無益で、したがってこれは政府の努力だけではなく、民間団体のより多くの意思疎通も必要とする。

実は大使に会う前、私たちは非常に緊張し、大使はとても近づき難く私たちもとても堅くなるだろうと思っていた。しかし実際に大使に会ったと実はとても気さくな方で、話し方も親しみやすく、急に郷里の親類に会ったような感覚になった。私はこのような駐日大使がいることは、日本の華人や華僑にとって本当に幸いなことだと感じた。

日 付：6月4日（火）10日目

大学名：中国農業大学

氏 名：聶車暢

「大使館交流編」

(1) 清華大: 治安が良い。機械化レベルが高い(ハウス食品工場の全自動化、人の手による検査と修理)、品質が良い(合格率、効率の高さ、40mm)、独占の予防(原材料は2社から調達)と共に材料元を確保。適時に設備検査・修理。

(2) 農業大: 先進的な科学技術の生産の細部への応用、節約と合理的な利用。工業と農業の関係では、工業の発展が農業の発展に貢献する。文化的覚醒: 自信、学習。

(3) 人民大: 有形と無形の細部から学ぶ。有形は技術。無形は管理の文化を賛同。

(4) 対外経済貿易大: キャンパス文化は多彩でしかも自律的。発展の道は責任を負った自由。

(5) 北外大: ヒューマニズされ、環境保護を追求。中国文化の伝播。

(6) 北京郵電大: 几帳面でまじめ(細かい気配りが出来、誠実—賈辰宇、ノートPCの修理保障、縁を丸く仕上げる)。

(7) 契約精神と信用; 道(茶、花、剣)の伝承。

大使は1973年に日本にきた新生中国が派遣した第1陣の日本留学生。中国と日本は「同文同種」の誤解を生み易く、「指向性」を持ち過ぎた比較は禁物で、むやみに卑下せず、むやみに尊大ぶらず、いかに自国、民族にとって有利かを考えれば良い。隣国、文化(相違点と共通点)、経済(ヨーロッパの近代産業文明)の戦後復興、中日関係: 政治、貿易(中国の対日投資の増大、海爾、華為、蘇寧)、人と文化の交流(500万人余り、200組余りの友好都市)、矛盾(靖国、歴史、領土と領海)

「日比谷松本楼編」

「君は兵を挙げよ、我は財をもって支援する」孫文と梅屋庄吉の間の友情は非常に感動的だった。当初の約束を、一生涯かけて果たす、梅家氏の精神は尊敬させられる。生涯で一人の知己が得られれば、それで満足だ。

「ディズニーランド編」

文化的アミューズメントの感覚。

日 付: 6月4日(火) 10日目

大学名: 北京郵電大学

氏 名: 趙子蔚

昼の松本楼では泣きそうになるほど感動した。

午前に大使とお会いした後、松本楼で昼食を摂り、2008年に胡錦濤が訪れた同じ部屋で、小坂文乃さんが語る孫文と梅屋庄吉の友情に聞き入った。

孫文は辛亥革命を開始する以前に日本で梅屋庄吉と出会い、梅屋氏は孫文に「君は兵を挙げよ、我は財をもって支援する」と約束したということを初めて知った。この誓いを彼は一生守った。孫文の最初の広州挙兵から、梅屋氏は多大な支持をし、最初の2回の革命はいずれも失敗したが、彼は誓いの言葉に背かず、孫文を励まし続けた。

孫文の逝去後、梅屋氏は大金を投じて4体の孫文銅像を鑄造し、中国に寄贈した。その後の両国は摩擦が絶えなかったが、梅屋氏は中日両国の友好促進の活動を止めることはなかった。梅屋氏は中国革命を支持したことで2度入獄したが、そのことを恨みも後悔もしなかった。最後には、日本政府と3回目の対中友好に関する商談に行く途中で、体力を使い果たし急死した。

大まかな記載によると、梅屋氏の革命期間における孫文への出資と援助は現在の価値で1,300億人民元を上回るという。2人はアジア独立という共通の夢で出会い、そしてこの友情を一生保ち続けた。これには本当に感動せざるを得なかった。その後、梅屋家の後代の人々も中国と密接な交流を保ち、中国の国家指導者からも手厚くもてなされており、それにはより感動させられた。先人の友情は私たちの世代でも絶えてはおらず、この称賛と感動に値する生死

の交わりが両国の友情に確かな基礎を築いているのである。

午後、私たちは私服に着替え、ディズニーランドに行き思い切り遊んだ。時間に余裕がなかったため、一つのスポットから次のスポットまでを、私たちは駆け足で移動した。行列の時間にも私たちは食べたり、写真を撮ったりした。私たちのグループはみなマントや帽子などを買い、交換しながら写真を撮り、心行くまで遊んだ。

今日は疲れて帰って来たが、それでも非常に楽しかった。

日 付：6月5日（水） 11日目

大学名：清華大学

氏 名：饒聡

今日、私たちは新江東清掃工場を見学した。ゴミ処理は日本の大きな長所で、日本が誇るべき点でもある。

ゴミの無害化処理での最初の一步はゴミの分別をしっかりと行うことだ。日本ではゴミの分類が非常に細分化され、中国のように回収できる物とできない物を簡単に分けるだけではない。ホームステイの2日間で、私も彼らが飲料ボトルをきれいに洗い流し、ラベルを切り取ってからゴミ箱に捨てていることに気が付いた。豆乳の1リットル紙パックを、彼らは先ずきれいに水洗いし、また紙パックを切り裂いて体積を減らしてからゴミ箱に捨てるのである。説明によると、このように種類別に分類したゴミは、また統一の透明な袋に入れて家の近くの道路脇に置くと、清掃職員が運んで行くという。しかも日によって回収するゴミの種類が違うとのこと。この10日間の見学の中で、ディズニーランドがゴミをこのように細分していなかった以外には、大学キャンパス、観光名所、道路脇など他の場所のゴミ箱はいずれも4～5個あり、人々にゴミの分別を求めている。これは非常に面倒だが、しかし日本は土地が狭くゴミを捨てる場所が少ないため分類処理するしかなく、従って日本国民のゴミ分類意識は非常に高く、彼らは自覚的に、あるいはすでに習慣としてゴミの分別を行っている。

こうした分別があるからこそ、今日見学した新江東清掃工場は有効な無害化処理を行うことができる。無害化を実現するため、ゴミ焼却の温度は800℃以上に制御され、ダイオキシンなど有害ガスの分解が保証されている。ダイオキシンの発生は主にプラスチックの燃焼による。しかし日本では中国のプラスチック禁止令のようなポリ袋の有償使用の措置はない。プラスチック汚染の減少という点では、やはり中国の方法の方が良いのではないだろうか。

今日の見学で私は世界でも先進的なゴミ処理方法について理解したが、この点に関しては国民の意識、ゴミ処理の技術を含め、中国はまだ多くを学ばなければならない。

日 付：6月5日（水） 11日目

大学名：中国農業大学

氏 名：趙未央

午前には新江東清掃工場の見学だった。見学はそれほど長い時間ではなかったが、私に深い印象を残した。ここでは日本の環境保護意識が十分に表されている。資源の分別搬入、分別焼却以外に、処理場のすべての可燃物はいずれも約1,000℃の高温下で焼却され、このような十分な焼却により、処理場ではダイオキシンなどの人体に有害な気体が発生することはない。ゴミ焼却余熱は火力発電に使用され、工場自体と周辺の施設に電力を供給している。このような科学的なゴミ処理方法は非常に賞賛に値する。

北京市朝陽区にも同様のゴミ処理施設があるが、ゴミの分別回収という考え方が中国では普及していないため、このような施設が中国で十分に運用できていないことは非常に残念だ。処理後のゴミは最終的に灰燼になり、埋め立てに利用される。このような方法は汚染を最小化することができる。昼食は東京湾の景観を眺めながらのビュッフェ料理で、台場の砲台の景色は非常に美しかった。

午後、私たちは有名な三鷹の森美術館を訪れた。宮崎駿は中国の子供たち誰もが知っているアニメーションの巨

匠だ。同氏の『千と千尋の神隠し』、『魔女の宅急便』、『紅の豚』、『天空の城ラピュタ』などは、皆良く知られている名作だ。

13:30に入館し、私たちは15分のアニメ短編映画を鑑賞したが、とても素晴らしかった。その後は記念品を買い求め、それから抹茶入りアイスクリームを食べた。

今晩は品川の中国式ビュッフェ料理で、今回の訪日での最後の夕食を締め括った。夕食後、私は渋谷109に行き、最後のショッピングをした。

日 付：6月5日（水） 11日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：陳亦行

中国と日本のゴミ処理における共通点と相違点

今日は新江東清掃工場を見学に行ったのだが、これは私が非常に期待していた見学だった。なぜなら私は以前北京でゴミ分別処理の調査研究を行い、北京のゴミ中継ステーションと朝陽区総合ゴミ処理場を見学したことがあるからだ。

全体的に見ると、処理場の処理機能にはほとんど違いがなく、いずれもゴミの堆積量減少を優先し、その次にはゴミの資源化である。その「総合性」例えば堆肥機能、金属回収、有害有毒物質処理などは両国の大型処理場の中にいずれも表されている。しかし中国のゴミ分別は日本に遠く及ばないため、いわゆる「可燃ゴミ」の中に大量の夾雑物が混ざり、湿度が高く、石炭を加えなければ高温燃焼ができない。またいわゆる「生ゴミ」堆肥は、中国ではしばしば食べ残しの料理をこの種類に入れているが、実際には堆肥に使われるゴミは油と塩分を含んでいてはならない。したがって中国のゴミ処理はコストが高く、効率が低い。

ゴミ処理を十分に行うには私たちはやはり「ゴミを減らす」道を模索しなければならず、これは中国も日本も考えなければならない問題である。

宮崎駿の世界

午後の三鷹の森ジブリ美術館の見学では本当にすっかり心を奪われた。さほど大きくない館内には、世界で最も感動的な手描きアニメーション映画誕生の記録が再現されている。この手描きによるアニメーション造りにこだわるおじいさんは、長い期間創作を続け、同時に非常に多くの本を読むことで、「普段から絶えず新たな知識を得て、それを自身の生活に活かす」事を実践している。宮崎おじいさんは止まることなく新たな能力を汲み取り、絶えず自らの想像を発信している。

日 付：6月6日（木） 12日目

大学名：中国人民大学

氏 名：楊暢

12日間の素晴らしいおとぎ話のような日程は間もなく幕を閉じようとしている。そして機内でこの日記を書き終えたこの時、私の心の中では、一つひとつのシーンが映画のように浮かんでは消え、皆のそれぞれの笑顔が私の眼前に現れ、私の胸の中にはすでにこの国とこの国の人々に対する感謝の気持ちが満ち溢れていた。

便器の便座さえも暖かくし、細部と笑顔を極限にまで成し遂げる国が、どうして好まれないことがあるだろうか。

全行程で私たちをもてなし随行してくれたスタッフの方々、先生や学友たちから、私たちが道を尋ねると親切に答えてくれた日本の方々、ホームステイ先の家族の心を尽くしたもてなしから、ディズニーランドのスタッフの親身な手助けまで…これらすべてが私にこの国の魅力を深く感じさせてくれ、またほんの少しではあるが彼らの生活を知ることがで

き、一般の人々の生活や考え方に触れたことにより、戦後この国が急速に台頭した理由の一部が理解できた。

「真の友人を得るためなら、どれだけ歩くことにも価値がある。」私の心の中は感謝とたくさんの思いで満たされている。同時に私たちは、とこしえの中日友好というのは冗談ではなく、心から期待できることだということを確信した。次世代の人間として私たちの責任はとても重いため、自らが担う責任をよりはっきりと認識しなければならない。

すべての感情を集めた私のキーワードは、感謝。

縁があり出会うことのできた皆さん一人ひとりに感謝。

日 付：6月6日（木） 12日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：李家聖

今日は日本での最後の日だ。

最後の日ではあるが、やはり私たちは予定にしたがってホテルニューオータニのゴミ処理システムを入念に見学した。表向き華麗なものでも、その中にはやはり地道に努力をしている部分があり、ホテルニューオータニのスタッフたちの日頃の努力が豪華なニューオータニを作り上げているのだ。

昼には、日本側が私たちのために歓送会を催してくれ、これまで見学で訪問した企業、大学とホームステイ先の家庭から代表者が参加した。これには私たちは感動させられただけでなく、永遠にこの友情を心に刻もうと思った。しかし大使館の代表が発言で述べていたように、「私たちは今回の旅を私たち自身の素晴らしい思い出にするだけでなく、それ以上に私たちが見聞き感じたことを国内の同胞に伝えなければならない」。

そうだ、友情は生来備わった物ではなく、双方が互いのために努力をしてこそ、初めて作り上げることができるのだ。

中日両国は互いに永遠の隣国であり、双方の関係を良好にすることは世界の大勢にとってのニーズであり、中日両国民の願いでもある。私たち大学生はこのために自分の力を捧げたい。

「真の友人を得るためなら、どれだけ歩くことにも価値がある！」

私たちはその準備ができています！

日 付：6月6日（木） 12日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：邱歆与

今日はついに帰国の日、多少の興奮と名残惜しさがある。朝、私たちは宿泊先のホテルニューオータニのローズガーデンを見学した。ここは多くのカップルが結婚式を行う場所だ。ここはビルの屋上にあり、一面のバラが無限のロマンスを感じさせ、またこのような屋上の利用方法は実に創意的だと感慨を覚えた。その後、私たちはホテルニューオータニの地下にあるホテル全体の管理施設を見学した。管理部門全体がすべて省エネとリサイクルの理念により、これまで見学した企業と同じくエネルギーと汚染排出の削減に尽力している。間もなく帰国するが、日本の企業は本当に私にとっても多くの感慨を残した。その中で最も感慨深いものは企業の社会的責任感だ。今回の中国大学生の訪日の旅を含め、日本の企業が自らの利益を持ち出して再び社会に還元しているからこそ、私たちは今回の貴重な日本訪問で、中日の友情を促進することができるのだ。私はこのような社会的責任感、調和のとれた社会における企業にとって不可欠なものだと思う。12日間の日本訪問の旅は間もなく幕を閉じるが、この美しい環境の国を去るのは本当にとても名残惜しく、それ以上に名残惜しいのは毎日と一緒に過ごした仲間たちで、異なる学校、異なる組織から来た人々がこのイベントによって一緒に集まったのだが、これは本当に不思議な縁だった。私は帰国後もきっと仲間たちを、そして日本で一緒に過ごしたこの12日間を懐かしむことと思う。

日 付：6月6日（木） 12日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：楊寧

今日は日本訪問の最終日だが、この12日間には多くの感慨があり、日本に来る以前と日本から北京に戻る時の日本に対する印象は完全に異なっている。以前の日本に対する理解の手段は新聞、書籍、ネットなどに限られていたが、今回自らの体験を通じてやっと日本に対する基本的な理解を得ることができた。もちろん今回の日本の旅は、これまでの私の日本に対する印象も覆した。それでも私たちは自分を卑下したり、また傲慢になってはならない。中国が日本に学ばなければならない面はたくさんあり、今回は多くの企業と2つの名門大学を訪問したが、確かに考えさせられる点が多々あった。ホームステイ先の福島さんご一家には特に感謝している。ホームステイの時には私を家族同様に扱って下さり、彼らとの触れ合いの中で私は日本の一般の家庭生活を体験し、また70～80年代の北京の様子をいくつか知る事ができた。そして今日のとある一言に私は感動させられた。それは「真の友人を得るためなら、どれだけ歩くことにも価値がある。」という言葉である。私たちは遠路はるばる北京から日本に来て、ホームステイ先の家庭の皆さんと友達になり、また関さんと知り合いになった。この12日間の日程の中で、関さんは一生懸命私たちの世話をして下さいました。また呂さんもとたいへん仕事熱心で、こんなに多くの素晴らしい友人と知り合いになり、私たちの今回の旅は素晴らしいものだった。

機会があれば外に出掛け、これまで見たことのない世界を見てみるべきである。この12日間の時間は短かったが、私の一生の思い出となった。親愛なる友人たちに別れを告げるのは名残惜しいが、人生の中では誰も一生付き添うことはないのも分かっている。だからたとえ私たちが別れを告げても、この友情がずっと続き、中日両国間が代々友好的に平和共存できることを望んでいる。

日 付：6月6日（木） 12日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：胡承蓉

今日は日程の最終日、午前、ホテルニューオータニのエコセンターの見学を終えた後、皆は荷物の整理を始めたが、ホテルを出る際には、多少残念な気持ちになっていた。私たちの中には沢山の収穫が得られた人がいれば、そうでない人もいたが、いずれにしても今回の訪日活動は、私が今まで参加した中で最も有意義な活動であったと言える。

朝、私たちはホテルニューオータニの環境保護・省エネ作業の見学に行った。回収したゴミの分別を実施し、脱水処理後に生まれる肥料は、引続き循環使用できるというエコロジーで効率的なものであった。

歓送会では、皆が二列に並びホームステイ先の家族、企業、大使館、学校の代表など続々訪れたゲストの方々を出迎え、中国人学生達の熱意と感謝の意を表した。会場を訪れた多くのゲストを目にし、私たちがこの12日間の間にこれほど多くの場所を訪問していたのだと感じ、もしこの12日間で学び得たことをまとめたら、それはきっと素晴らしいものになるだろうと思った。各代表者の挨拶、参加6学校の報告と演目の上演後、私たちはすべての訪問活動を終え、旅行日程が円満に終了した。ホームステイ先の家族との別れの時、私たちは中国、日本に関わらず、必ず再会することを約束した。

バスの中では、昨日に比べて、皆の感動はより深いものになっていた。特に郭団長の挨拶は、その心からの思いが溢れ、私たちにより強く今回の訪日活動の意義を実感させた。この12日間の交流を通じて、私たちは日本の技術・文化・生活等の様々な方面について身をもって体験することができ、まさに百聞は一見に如かずであった。私たちは、それらを記録するだけでなく、今回の活動での収穫をより多くの人々に伝えていくことがより重要である。訪日団内の学生・教師間にも深い友情が築かれ、今後お互いに頻繁に連絡をとるかどうかに関わらず、お互いの心の中に皆、美しい思い出を刻んだのである。中日友好協会が私たちのためにこのような貴重な訪日の機会を与えてくれたことに感謝すると共に、団長、関さん、呂さん、潘林さん、夢妍さん達のこれまでの私たちへのお世話に感謝し、私はこれから、今回の訪日活動の収穫をしっかりと心に刻み、そして人々に伝えることを自分の大切な使命としたいと思う。そして私たちの友情が長く続くことを願っている。